

# ごあいさつ



会長 渋谷 健

二〇〇四年の春、定期総会開催の時期を迎えました。長引く経済不況や世界各地に多発する紛争等の悪条件にも拘わらず、会員各位におかれてはその持てる力を遺憾なく発揮され、各界で縦横無尽にご活躍されておられます。当会にとりましては例年のように新進鋭の新入会員を多数お迎えでき、嬉しい限りであります。

さて、まず会員各位の関心の深い母校の現状をご報告いたします。ご関係者の大変なご尽力により伝統を堅持し、進学面では難関大学等にも多数の合格者を輩出するなど躍進著しいものがあります。願わくば今後も更なる飛躍を期待するものであります。施設設備の面でも、百周年を契機に充実され、加えて理科室棟の全面改築も完成いたしました。蔵の街川越に相応しい様子を現しました。お力添え賜った知事さんにもお約束したようにこれを活用し人材の輩出に努めて欲しいと願うものであります。また、「ウォーターポイズ」で一躍有名になった水泳部のシンクロは

相変わらず人気がありますが、それ以外にも多くの部が全国大会や関東大会等で活躍していることは新聞紙上でご承知の方も多いことでしょう。頭脳の優秀さに加え、人間形成や体力増強等にも力を入れ、進学校といった堅いイメージにとられない教育活動に、同窓生としても拍手を贈りたいと存じます。

さて、ここで本会のこの一年を回顧してみたいと思います。昨年度の総会では、前埼玉県副知事の鈴木宮天氏(高十回)による講演が興味を引き、地方の実情がよく分かったという中央官庁に勤めて居られた方の感想をはじめ、多大の感銘を与えていただきました。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。また、秋の散策会は東松山市で開催、参加者約百十名を数え盛況でした。箭弓神社(澤田昌生宮司)高十回)から古見の百穴を見学し、古代の面影を偲び、「マリエール松山」での母校応援団のご参加を得ての懇親会、感銘深い一日でした。東松山初雁会の嶋本正雄会長、伊田実行委員長をはじめご関係者のお骨折りに感謝いたします。なお、本年は在京初雁会(田中隆会長)にお願いし、汐留方面と聞いております。多数のご参加を期待いたします。会則改正に伴う卒業後二十五年経過した第三十回の方々に終身会費のご協力をお願いしたところ、楠川・川島初雁会、川中四十四回等の方々のご協力もあり、八十五万円近くの前年が集

まり有り難く思っております。今年には第三十回の方々を中心にお願いしたく思います。また、高五回の有志による「古希記念誌」の発刊、本会へのご寄付にも敬意と感謝を捧げます。創立百周年を契機にスタートした浦和・熊谷・川越・春日部四高校の親善ゴルフ大会も本校が当番校となり、九月十一日清澄ゴルフで開催、有志多数のご参加を得てお陰で団体戦優勝の栄冠を得ました。本年は春日部の主催となります。多数のご参加を期待いたします。

各地区の初雁会がそれぞれ趣向を凝らし、個性をもって開催され地域の多くの同窓生の期待と関心を集めていただいていることは嬉しい限りであります。

なお、今春、狭山市に初雁会が誕生するという嬉しいニュースも届いています。是非、各初雁会が今後も熱心に計画を練り、世代と連帯に励まれ、存在意識を確固たるものにしていただくよう切に祈るものであります。

昨年は、大変残念なこともありましたが、それは、同窓会の名譽会長としてご指導いただいた第二十六代校長の小室英夫氏と第二十八代校長の鈴木良栄氏が相次いで逝去されました。これまでもご功績を偲び、ご冥福をお祈りいたします。

母校も教育改革の波を受け、通学区域の廃止という県の方針のもと、人材の確保という命題に取り組む年になり、これから二、三年が今後を左右する大切な時期にしようと思っております。ご関係の皆様方にご期待すると同時に、一層のご精進をお願いし、心の故郷、川高

の名を何時までも燦然と輝かせて欲しいと強く願うものであります。規模の拡大した同窓会を如何に運営し、会員各位にご理解とご協力を得るかが本年の課題でありま

## 川越高校の学校力

校長 菊池 建太



母校の校長として赴任して以来、早いものでおかげさまで二年が経過いたしました。昨年十二月末には念願の普通・特別教室棟(通称新理科棟)が完成し、さらに三月には周辺整備も終了し、蔵づくり風屋根をもった四階建て建物は地域にマッチしております。竣工間近の昨年十二月六日には、埼玉県宮蔵課と川越高校共催で近隣の方々、同窓会、PT会、後援会、生徒を対象にした内覧会が開かれました。参加者は約百名で、二班に分かれての見学後、アンケートにこたえていただきました。特別教室の設備、フローリングされた普通教室、県産材を使用した教室の壁など大変好評でした。挨拶のなかで、前副知事鈴木宮天氏から是非ノーベル賞をいただくような人材を育成して欲しいと激励の言葉がありました。また、渋谷同窓会長からは新理科棟が完成するまでのOBの

す。何とか、各位のご助言とご忠告をいただきながら、時代にマッチした同窓会に脱皮できるような懸命な努力をいたすことをお誓いし、ご挨拶いたします。

方々のお力添えを披露していただきました。このような、経緯と期待をもって完成した新理科棟を今後大切に使用し、かわたかの知の拠点として、今年度、文科省の指定であるサイエンス・パートナーシップ・プログラム事業が内定し、同窓生の力も借りて「物理学最前線」というテーマで実施いたします。三月二十四日の埼玉新聞では一面を使用して新理科棟を紹介していただきました。

話は戻りますが、夏休み明けの九月には、くすのき祭が開かれ、二万四千人が来校しました。前年の経験を踏まえ、実学生徒の新誘導作戦と警備員や川越警察署のご協力のもと無事終了することができました。翌日、ブルサイドからテレビの生放送が約二十分。さらに、十月にはNHKの「人間ドキュメント」にも取り上げられ川高を全国に発信しました。

部活動の活躍は運動部、文化部ともに著しいものがありました。長崎県でのインターハイには弓道部が個人で出場いたしました。関東大会にはソフトテニス部が個人で、水泳部がリレーと個人で出場いたしました。サッカー部、ラグ

ビー部、バトミントン部、バレーボール部、バスケット部、剣道部も県内大会でレベルの高さを十分発揮しております。

新開部は全国高等学校新聞コンクールで全国高等学校新聞教育研究会賞に輝きました。伝統ある音楽部は、惜しくも全国大会出場を逃しました。古典ギター部、放送部、物理部、郷土部などの活躍も特筆されるものがありました。

年が明けますと、入試シーズン。昨年度は、年度途中で全県一区の入試となることが決まり、本校としては、正しい情報発信に努め、学校説明会を多くしたり、中学校訪問を展開いたしました。

その結果、推薦は五・六一倍、一般は二・一二倍と共に過去最高の倍率となりました。新学区からの入学者は二四名となりました。

一方、大学への進路状況は、現役合格率が六四・五％と前年度より十％近く上昇し過去最高の結果となりました。進路実績は、浪人を含めて東大、東工大など国公立大に一五・二名、早大、慶応大など私立大学に九四二名が合格し、全国公立高校の上位クラスとなっております。また、医学部への合格者も二十名を超えています。今後、さらに地域の期待に応えられるよう、総合としての学校力を高め、実績をあげていきたいと考えております。

最後になりますが、渋谷同窓会長さんをはじめ、地区の初雁会、そして多くの同窓生の皆様の変りぬ御支援をお願いいたしまして挨拶と致します。